

戦死やあわれ

名大図書館で本を探していたら、たまたま表題の本に出会った。2014年10月4日にレポートした「母（かあ）べえ」を思い出した。山田洋次監督が『母べえ』が映画になるまで」として紹介していた竹内浩三の詩「骨のうたう」の冒頭である。

本をよく見ると、副題は「ある無名ジャーナリストの墓標」となっている。その人はNHKのチーフディレクターの西川勉さんだ。「新大阪駅で倒れ死ぬ」と報じられた。48歳で、急性心不全によるという。「中高年を襲う突然死」が話題となる。

東京新聞1982年7月16日朝刊から。15日午後7時ごろ、新大阪駅新幹線ホームで、上り列車を立って待っていた中年の男の人が突然ホームに倒れた。そばにいた人たちが人工呼吸し、近くの病院に運んだが既に死亡していた。淀川署で調べたところ、所持品などから、NHKチーフディレクター西川勉さん(48)と分かった。死因は急性心不全とみられる。西川さんは現在NHK教育テレビで「日曜美術館」を手がけており、この日は夏のラジオ特集番組打ち合わせの帰りだった。

その番組が1982年8月10日にラジオ第一で放送された「戦死やあわれーある無名戦士の青春」である。西川さんによる放送台本（草稿）が遺稿集に収録されている。「昭和20年4月、フィリピン、ルソン島で23歳で戦死した竹内浩三の人間像を、残された詩・手紙・日記の朗読と関係者の証言によって浮彫りにし、一兵卒の死の意味を問う。」SE（風の中に鳴る骨の音）、朗読「骨のうたう 戦死やあわれ 兵隊の死ぬるや あわれ」が続く。証言（姉松島こう）「骨も遺品も帰らなかった。今でも信じられない。心のやさしい、さびしがりや。軍隊や戦争が何よりもきらい。詩や絵や音楽の好きな子だった。出征の日のことが、昨日のように思い出される。見送りの人々が待っているのに、自分の部屋で膝をかかえて、チャイコフスキーの悲愴をきいていた。『姉さん、オレ行きとわないー』」音楽（チャイコフスキー 悲愴）

最後の語り「紀伊半島の山脈が伊勢湾におちこむ東端、標高500米の朝熊岳は、古くから知られた霊場である。竹内浩三の故郷伊勢市を見下ろすその山頂に、肉親や友人の手で浩三の詩碑が建てられた。昭和55年5月25日、除幕式の日には浩三の死を悲しむかのように、朝から小雨が降り続いていた。御影石の白い碑面には、浩三の詩『骨のうたう』の一節がカタカナで刻み込まれている。」そして、最初と同じく「戦死やあわれ」の朗読が続き、SE（風の中に 骨の音）で番組が終わる。

西川勉さんと『戦死やあわれ』について、またレポートしたい。

(2016年3月20日)

